

12) 卵管癌 5 症例の臨床病理学的検討

野崎真奈美・中村 稔
倉林 工・吉谷 徳夫
本間 滋・児玉 省二
金沢 浩二・田中 憲一 (新潟大学産婦人科)

原発性卵管癌は、極めて希な女性性器悪性腫瘍であり、術前に診断することは困難な疾患とされている。当科で過去12年間に経験した卵管癌5例について、臨床的ならびに組織学的検討を行った。

平均年齢は62.4歳(41~70歳)で、未妊婦は3例であった。臨床症状として、不正性器出血(4例)、水様帯下(1例)、下腹部不快感(1例)、小脳症状(婦人科瘡瘻疑い1例)がみられた。術前の細胞診では、1例が頸部、体部ともに悪性細胞陽性であり、内膜組織診では2例が悪性、1例が悪性疑いであった。CA125値は、測定4例中3例で上昇を認めた。術前診断は、付属器腫瘍(腫瘍)3例、子宮体癌2例であり、卵管癌と診断し得た症例はなかった。術中組織診で診断された症例は3例で、2例は術後摘出標本で診断された。臨床進行期(FIGO卵管癌の期別分類に準じる)は、Ia, Ic, IIa, IIb, IIIcであり、原則的に卵管癌に準じた手術が行われた。組織型は、いずれも漿液性腺癌(中分化型1例、低分化型4例)であった。全例に術後化学療法が施行され、1例がFAMT、4例がFCAP療法であった。予後は、最近の症例が多く経過が短いが、1例が再発し癌死となった。

13) 甲状腺未分化癌11例に対するCDDPの臨床効果

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
栗田 雄三 (新潟病院内科)
佐野 宗明・赤井 貞彦 (同 外科)
富樫 孝一 (同 耳鼻科)
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)

甲状腺未分化癌は予後が最悪で、近年でも絶望的な疾患とされている。今回、我々は分化癌11例にCDDPを投与し、良好な成績を得たので報告する。「対象および方法」対象は手術もしくは剖検で組織を確認した11例で、大細胞型9例、扁平上皮癌混合型2例である。CDDPの投与は多剤併用で行い、主にEAP(Etoposide 60mg/m²×5, ADM 30mg/m², CDDP 80mg/m²)療法である。「腫瘍縮小効果」効果判定は固形癌直接効果判定基準に則ると、CR(著効)3例、PR(有効)5例、NC(不変)3例で、奏効率は72.3%であった。「延命効果」CDDP非投与群15例と投与群11例の術後生存率曲線をKaplan-meier法でみると、非投与群のMST(50%生

存期間)は2.5カ月、1年生存率0%であるのに比し、投与群のMSTは11.3カ月、1年生存率43.6%で、有意に(p<0.01)延命効果があった。「結論」甲状腺未分化癌でも比較的早期で全身状態のよい患者は、CD-DPで治癒する可能性があると思われる。

14) 進行、再発卵巣癌におけるCDDP(CBDCA), Etoposide療法

中村 稔・吉谷 徳夫
本間 滋・児玉 省二
金沢 浩二・田中 憲一
高橋 威・丸橋 敏
後藤 司郎・新井 繁
湯沢 秀夫・大桃 幸夫
徳永 昭輝・竹内 裕夫
花岡 仁一・星野 茂夫
阿部 進・渡辺 担
高橋 完明・笹川 基
上田 昌博・西山 藤司夫
渡辺 隆夫・茅原 保
高橋 正明・須藤 寛人
安達 茂実・八幡 剛喜
永松 幹一郎・西村 紀夫
鈴木 孝明・大野 雅弘 (新潟婦人科腫瘍研究会)
後藤 明

CDDPとEtoposide(VP-16)の併用については基礎的検討がなされ、相加・相乗効果のあることが確認されている。またCDDPのanalogueであるCBDCAは、卵巣癌においてCDDPと同等の高い有効率(38%、日本における第2相試験)を示した。今回CDDP(CBDCA)とvp-16との併用療法の有効性について臨床的検討を行った。対象は原発性卵巣癌21例(前治療無7例、前治療有14例)で、CDDP(CBDCA)は50mg/m²(300mg/m²)をD1に、vp-16は100mg/m²をD1-5に投与し、原則として2コース以上治療した評価可能症例の有効率は、前治療無で85.7%(6/7, CR2, PR4)、前治療有で22.2%(2/9, PR2)を示した。dose limiting factorは骨髄抑制でCBDCA例では血小板の減少を認めたが、tolerableであった。このresimenは進行卵巣癌のinduction chemotherapyとして有効であるが、治療抵抗例、再発例については今後の検討を要すると思われる。

15) 高齢者進行肺癌治療の問題点

横山 晶・各務 博 (県立がんセンター)
木滑 孝一・栗田 雄三 (新潟病院内科)

今回我々は、1982年~89年に当院を受診下70才以上の高齢者肺癌患者のうち非手術例につき検討した。症例は非小細胞癌175例(男性131例、女性42例)、小細胞

癌33例(男性29例,女性4例)であった。単変量解析(Wilcoxon test, Log-rank test)を施行した後,その結果をふまえてCox proportional Hazard modelを用い多変量解析を施行した。この結果,非小細胞癌ではT, M, PS, Albが有意(p<0.05)な予後因子として,放射線治療が有意な予後改善因子として取り込まれた。小細胞癌ではT, M, N, SEXが有意な予後因子として,化学療法が有意な予後改善因子として取り込まれた。

以上の結果より高齢者であっても,非小細胞癌では放射線治療を,また小細胞癌で化学療法を積極的に施行すべきであるものと考えられた。

16) 肺小細胞癌に対する CPA+ADR+VCR+ETP 療法と CDDP+ADR+VCR+ETP 療法の無作為比較試験

| | |
|-------------|-------------------------------|
| 森山 裕之・伊藤 和彦 | (新潟大学第二内科 新潟肺癌化学療法 検討会) |
| 三間 聡・水沢 章朗 | |
| 宮尾 浩美・若林 昌哉 | |
| 吉沢 弘久・張 高明 | |
| 鈴木 栄一・荒川 正昭 | |
| | |

目的:肺小細胞癌に CPA+ADR+VCR+ETP 療法(以下A法)CDDP+ADR+VCR+ETP 療法(以下B法)の無作為比較試験を施行し,奏効率,生存率を検討した。

対象及び方法:1988年2月より1991年2月までに新潟肺癌化学療法検討会で63例を登録し,うち評価可能例はA法が29例,B法が35例であった。効果判定は2クール終了後行い,Kaplan Meier 法にてMedian Survival Time (MST)を算出した。

結果:臨床病期,性別,年齢はA・B法に有意差はなかった。奏効率で,A法58.3%,B法75.8%で有意差は認められなかったがB法に高い傾向がみられた。MSTはA法B法ともに50週で有意差は見られなかった。

結語:現時点では統計学的な有意差は認められないがCDDPを含むB法がより有効性の高い治療法と考えられた。長期生存例は,手術例,放射線療法併用例にみられ,集学的治療が重要と考えられた。

17) 転移性脳腫瘍の放射線治療成績

| | |
|------------|------------|
| 稲越 英機・伊東 猛 | (新潟大学放射線科) |
| 酒井 邦夫 | |
| 武田 憲夫 | |
| 高橋 均 | |
| 根本 啓一 | (同 第二病理) |

1980~1989年に照射した187例のCT所見から局所制御(腫瘍計測と壁非薄化・濃染低下で判定)及び脳障

害を検討した。対象は肺原発(143例)が多く,転移は単発83,多発85,髄膜症7例である。治療照射は殆ど全脳(全脳のみ138,全脳+限局44例)で通常分割の50Gy相当が照射され,31例には切除も行われている。累積法【】は照射開始より起算した。

30Gy以上照射単独例の一次効果は,CR30,PR44, NR43,PD1例であった。術後照射CR17例の再発率は【2年18%,4年39%】。30Gy以上照射PR+NR99例の再増大率は【7カ月56%,11カ月94%】であった。また原発転移病巣はCRのみで新転移巣が10例【1年22%,3年57%】に認められた。一方,30Gy以上照射151例中,27例【1年50%,2年83%】にびまん性脳萎縮の進行,15例【2年55%,4年76%】に白質低吸収化の増強が認められた。

以上より,積極的な切除やboost照射,単発転移では限局照射単独の方針も考えられる。

18) 悪性脳腫瘍に対する RF 加温療法

| | |
|-------------|---------------------|
| 高橋 英明・田中 隆一 | (新潟大学脳研究所 脳神経外科) |
| 関原 芳夫 | |
| 本道 洋昭 | (水原郷病院脳神経外科) |
| 中島 拓 | (Dartmouth 大学脳神経外科) |

我々は悪性脳腫瘍に対してRF加温療法を行ってきた。円盤型電極を用いた区域加温法を主として行ってきたが,最近では深部脳腫瘍に対しても応用可能な針型電極による佐敷内加温法も行っている。今回我々は,より電界を安定させ,複数本の組み合わせにより区域加温法が可能となる針型アプリケーションを開発したので,寒天ファントムを用いた温度分布の検討を中心に報告する。また,低出力時に持続して安定した加温のできるRF generatorについても開発したので併せて報告する。

針型電極1本を用いた際の加温域はその加算となるにすぎないが,並列に4ないし5本ずつ用いた場合その区域は均一に加温される。更に針型電極を一列に5本並べ,円盤電極を対列される方法でも同様な区域加温が可能であった。新しく開発したこの針型電極は,組織内かつ区域加温の両面性を持ち,臨床応用が期待される。

19) 食道癌術後10年目,挙上胃管に発生した胃癌の1治療例

| | |
|-------------|-----------------|
| 八木 伸夫・名村 理 | (長岡赤十字病院 外科) |
| 岡村 直孝・若桑 隆二 | |
| 田島 健三・和田 寛治 | |
| 遠藤 次彦 | |

症例は61歳男性。10年前Ei領域食道の扁平上皮癌に